

(コラム 279 2026年3月13日)

前例のない航空作戦が示す精密打撃の構造的逆説
—イラン攻撃から見える現代の統合航空打撃—

はじめに

2026年2月28日、米国はイスラエルと連携し、イランに対して大規模な打撃作戦「エピック・フューリー（壮絶な怒り）」(Epic Fury)を実施した¹。米戦争省のファクトシートによれば、イラン政権の治安機構を解体することを目的とする同作戦では、最初の48時間にイランの指揮統制施設など1,250以上の標的が攻撃されたとされる²。作戦は、報道によれば、サイバー領域及び宇宙領域での活動から始まり³、その後、航空・海上戦力を中心とする多領域統合作戦として展開された⁴。統合参謀本部議長のケイン空軍大将(Gen. Dan Caine)は、この軍事作戦を「歴史的」かつ「前例のない(unprecedented)」ものと呼んだ⁵。

この作戦の特徴は、単なる大規模空爆という点に留まらない。高度な情報・監視・偵察(ISR)、精密誘導兵器、ネットワーク化された指揮統制、無人機の導入によって、極めて多数の目標を短時間で攻撃する能力が示された点にある。すなわち、統合航空作戦が、高い作戦テンポと高密度打撃能力を備えるに至っていることが明確になったのである。

しかし、この作戦は同時に、現代エアパワーの一つの逆説も浮き彫りにしている。冷戦後の航空戦思想は、精密誘導兵器と情報優勢によって、より少ない兵力と限られた打撃で敵の中枢機能を麻痺させ、戦争を効率化できるという前提に立っていた⁶。ところが今回の事例を見ると実際には、精密化と情報優勢の拡大は、攻撃可能な目標の範囲を拡大し、結果として戦闘密度を高める傾向を生み出しているように考えられる。すなわち、より多くの目標を識別し、同時に打撃可能となったことが、結果として要求される打撃量の増大をもたらして

¹ U.S. Central Command, "U.S. Forces Launch Operation Epic Fury," February 28, 2026, <https://www.centcom.mil/MEDIA/PRESS-RELEASES/Press-Release-View/Article/4418396/us-forces-launch-operation-epic-fury/>.

² U.S. Department of War, "Operation Epic Fury: First 48 hours," March 1, 2026, <https://media.defense.gov/2026/Mar/03/2003882611/-1/-1/0/OPERATION-EPIC-FURY-FIRST-24-HOURS.PDF>.

³ 畑宗太郎「イラン攻撃、米軍が作戦詳細明かす 最初に動いたサイバー軍と宇宙軍」『朝日新聞デジタル』2026年3月3日。

⁴ "Operation Epic Fury: First 48 hours."

⁵ Bill Hutchinson, "Unprecedented": How overwhelming US attack on Iran unfolded," ABC News, March 3, 2026, <https://abcnews.com/Politics/unprecedented-overwhelming-us-attack-iran-unfolded/story?id=130674128>.

⁶ 冷戦後の軍事技術革命論では、航空・宇宙ISRによるリアルタイム目標情報と長距離精密誘導兵器をネットワーク化されたシステムとして統合することで、敵軍主力を撃破することなく戦略目標を短期間で攻撃する「戦略打撃」の可能性が論じられた。Andrew F. Krepinevich, Jr., "The Military-Technical Revolution: A Preliminary Assessment," Center for Strategic and Budgetary Assessments, 2002, p. 27.

いるのである。その結果、弾薬、無人機、補給、継戦資源といった量的資源への依存が、逆に強まっていることを示唆している。

もちろん、精密化それ自体が無意味になったわけではない。むしろ問題は、精密化と情報優勢の効果が発揮されるほど、同時に新たな量的要求が生じる点にある。換言すれば、航空戦力の効率化を目指したはずの技術革新が、結果として物量的能力の重要性を再浮上させているのである。

また、一つの事例から現代航空作戦全体の変化を直ちに一般化することには慎重であるべきである。しかし、今回のイラン攻撃は、現代航空作戦の一つの方向性を示す事例として検討する価値がある。

本稿では、今回のイラン攻撃を事例として、統合ターゲティング・サイクルと ISR 優勢に支えられた現代航空作戦の特徴を整理し、その背景にある航空戦思想の変化と、そこに生じつつある精密打撃の構造的逆説について検討する。なお、本稿は、この作戦を現代航空作戦の一つの方向性を示す事例として分析するものであり、そこから精密打撃と量的能力の関係について、より広い示唆を得ることを目的とする。

キーワード：現代航空作戦、精密打撃、ISR、無人システム、質的優位と量的拡大

1 本作戰の作戰構造

今回の作戦は、米国とイスラエルによる大規模な統合打撃作戦として実施された⁷。報道によれば、攻撃命令は 2026 年 2 月 27 日に発出され、その後約 9 時間半で攻撃が開始されたという⁸。この点は、政治的意思決定から軍事行動までの接続が、比較的短時間で行われたことを示している。

作戦の初動段階では、サイバー軍及び宇宙軍が、イランの通信ネットワークや監視システムに対する妨害・攪乱作戦を実施したと報じられている。これは敵の状況認識能力と指揮統制能力を低下させ、後続の航空攻撃の効果を高めるための戦場形成 (shaping the battlespace) として位置づけられる。ケイン統合参謀本部議長は、調整された宇宙・サイバー作戦によって、責任区域全体の通信・センサーネットワークを効果的に妨害し、敵が視認・調整・効果的な対応能力を喪失したと述べている⁹。

⁷ イスラエル側は、本作戰を「ライオンの咆哮作戦」(Operation Lion's Roar) と命名している。"The war in the Middle East in maps, video and photos," *The Guardian*, March 3, 2026, <https://www.theguardian.com/world/2026/mar/02/war-middle-east-maps-video-photos-us-israel-iran?utm>.

⁸ 畑「イラン攻撃、米軍が作戦詳細明かす」。

⁹ Martin Matishak, "Cyber Command disrupted Iranian comms, sensors, top general says," *The Record*, March 3, 2026, <https://therecord.media/iran-cyber-us-command-attack>; Kuhu Badgi and Lauryn Williams,

イスラエルの防衛分析家であるエシェル (Tamir Eshel) の分析によれば、作戦開始後、米軍は「単一の同期化された攻撃波 (single synchronized wave)」のように「あらゆる領域にわたる大規模かつ圧倒的な攻撃 (massive, overwhelming attack across all domains)」と表現した作戦を開始した。最初の 12 時間で約 900 回の攻撃が実施され、24 時間以内には攻撃目標は 1,000 を超え、48 時間以内には 1,250 以上に達した¹⁰。

作戦には、表 1 に示す戦力が投入された。

表 1：エピック・フューリー作戦における米軍投入戦力と任務

機種等	任 務
F-22	航空優勢確保
F-35/F-15E/F-16CJ	敵防空制圧 (SEAD)、攻撃、精密標的捕捉
B-2	強化ミサイル施設及び核インフラへの精密攻撃 (2,000 ポンド誘導貫通爆弾 (GBU-31 級) 使用)
B-1B	高容量の爆弾輸送
B-52H	弾道ミサイル及び C3 施設攻撃
トマホーク巡航ミサイル (Block IV/V)	地上攻撃
精密打撃ミサイル (PrSM) 搭載 HIMARS	地域基地からミサイル発射装置及び防空資産に対する地上発射型火力支援
低コスト無人戦闘攻撃システム (LUCAS)	イラン製シャヘド 136 型を参考にした低コスト無人攻撃システム。中央軍司令部 (CENTCOM) がミサイル基地、海軍目標、地下施設に対して運用
MQ-9、E-3 早期警戒機、RC-135 偵察機	情報収集・監視・偵察 (ISR)、戦闘指揮統制、戦果評価 (BDA)

引用：エシエルの分析を基に筆者作成。

また、ジャーナリストのガルシア (Marisa Garcia) は、CENTCOM が「一世代で最大規模の地域における米軍の火力集中 (the largest regional concentration of American military firepower in a generation)」と表現する本作戦は、次の 3 つのフェーズで構成されると整理している。まず、第 1 フェーズは、戦闘空間の形成 (防空、C2、ミサイルノード) である。CENTCOM は「キック・ザ・ドア」航空作戦 (“kick-the-door” air campaign) を開始し、

“How Will Cyber Warfare Shape the U.S.-Israel Conflict with Iran?” CSIC, March 3, 2026,

<https://www.csis.org/analysis/how-will-cyber-warfare-shape-us-israel-conflict-iran>.

¹⁰ Tamir Eshel, “OPERATION EPIC FURY / ROARING LION,” *Defense Update*, March 3, 2026,

https://defense-update.com/20260303_epic-fury.html?utm.

統合防空システムと指揮ネットワークを破壊した後、攻撃目標を拡大した。第2フェーズは、イスラエル空軍 (IAF) による攻撃パッケージである。エシエルの分析を参考にすれば、IAF は約 200 機の作戦機を大規模展開し、イラン西部・中部全域の約 500 の軍事目標に対し攻撃パッケージを実行し、弾道ミサイル発射装置、防空施設、指揮統制拠点、核関連インフラを重点的に攻撃した。第3フェーズは、米軍による攻撃パッケージである。ここで、先にエシエルが整理した表1に示す戦力と任務が遂行されたのである¹¹。

加えて、米軍は潜水艦の魚雷攻撃によってイラン水上艦艇を撃沈した他、ホルムズ海峡とオマーン湾沿岸の港湾にある艦艇、海軍司令部、沿岸レーダー、対艦ミサイル基地も攻撃した。エシエルによれば、その目的はホルムズ海峡封鎖能力の無力化にあったと言われる¹²。つまり、作戦は空中打撃に限定されず、海上戦闘を含む統合的軍事行動として展開された可能性が高い。

攻撃目標は、これまで述べてきたとおりであるが、ここでいう「目標」が施設単位なのか、照準点 (aimpoints) 単位なのかについては留意が必要である。また、どの程度の弾薬が各々の目標に対して使用されたかも現時点で不明である。したがって、この数値を他の作戦と機械的に比較することには慎重であるべきだが、高密度のターゲティングと打撃が短時間で実施されたこと自体は重要であり、注目すべきである。

さらに注目すべきは、この作戦で米軍が初めて自爆型ドローンを投入したことである。ガルスシアによれば、CENTCOM の「タスクフォース・スコーピオン・ストライク (Task Force Scorpion Strike)」は、戦闘で初めてイランのシャヘド型攻撃ドローンを模した低コスト無人戦闘攻撃システム (Low-Cost Uncrewed Combat Attack System: LUCAS) を投入した。これは、使い捨ての攻撃ドローンである¹³。

一方、エシエルによれば、イラン側はイスラエル向けにシャハブ3 (Shahab-3) 等の中距離弾道ミサイル、湾岸諸国向けにファテ-110 (Fateh-110) 短距離弾道ミサイルやスーマール/ホヴェイゼー型 (Soumar/Hoveyzeh-type) 巡航ミサイルを使用した他、シャヘド136/131 (Shahed-136/131) 無人機を大規模な群れで使用したと言われる¹⁴。これに対し、米軍や同盟国は米製防空システムを用いて迎撃した。しかし、戦争長官のヘグセス (Peter Hegseth) らは、それらの防空システムは対弾道ミサイル仕様であり、シャヘドのような低

¹¹ Marisa Garcia, "Operation Epic Fury: How the US and Israel's coordinated attack on Iran unfolded," *Aerospace Global News*, March 2, 2026, <https://aerospaceglobalnews.com/news/operation-epic-fury-us-israel-air-campaign-iran/>; Eshel, "OPERATION EPIC FURY / ROARING LION."

¹² Eshel, "OPERATION EPIC FURY / ROARING LION"; Stephen Sorace, "US submarine sinks Iranian warship by torpedo in a first since World War II," *FOX News*, March 4, 2026, <https://www.foxnews.com/politics/us-submarine-sinks-iranian-warship-torpedo-first-since-world-war-ii>.

¹³ Garcia, "Operation Epic Fury."

¹⁴ Eshel, "OPERATION EPIC FURY / ROARING LION."

空、低速目標を完全には撃墜できないとの見解を示している¹⁵。

このように、本作戦はサイバー・宇宙領域による戦場形成の後、大規模な航空打撃と海上作戦を組み合わせた多領域統合作戦として展開されたと考えられる。

また、本作戦の進展に伴い、作戦の持続性に関する問題も指摘されている。米国の国防予算は近年 9,000 億ドル規模に達しているものの¹⁶、今回の対イラン軍事作戦では巡航ミサイルや精密誘導兵器、無人機などの高価な兵器が大規模に使用されており、戦費は作戦開始から数日で既に 10 億ドル（約 1570 億円）規模に達した可能性がある¹⁷と報じられている。これは、近年の航空作戦が高精度兵器への依存を強めてきたことによるコスト構造上の問題を示唆するものでもある。

この点は、今回の作戦が長期的な消耗戦へと発展する可能性とも関係している。実際、一部の専門家は、紛争がミサイル備蓄をめぐる「消耗戦 (war of attrition)」の様相を帯びつつあるとの見方を示している¹⁸。その議論の焦点は、「この作戦を継続した場合、米軍の戦略的備蓄や他戦域における戦争遂行能力に影響が及ぶのではないか」という点にある¹⁹。

すなわち、現在の航空作戦は、高価な精密兵器による高強度打撃によって短期間の戦闘では極めて高い効果を発揮する一方、弾薬の消耗が激しく、「どちらが先に倒れるか」という長期的な消耗戦の様相となった場合、その作戦持続性が大きな課題となるのである。

2 本作戦の特徴

今回の作戦には、いくつかの重要な特徴が見られる。

¹⁵ 「米国の防空システム、イランの自爆型ドローンの多くは迎撃不可能か 当局者」『CNN』2026年3月5日。

¹⁶ U.S. Senate Committee on Armed Services, *Summary of the Fiscal Year 2024 National Defense Authorization Act*, December 13, 2023, https://www.armed-services.senate.gov/imo/media/doc/fy24_ndaa_conference_executive_summary.pdf.

¹⁷ ダーキーは、戦争が長引けば戦費が 1000 億ドル（約 15 兆 7000 億円）近くに達する可能性がある¹⁷と指摘している。Alison Durkee, “How Trump’s War With Iran Could Have Already Cost Over \$1 Billion,” March 3, 2026, <https://www.forbes.com/sites/alisondurkee/2026/03/03/how-trumps-war-with-iran-could-have-already-cost-over-1-billion/>.

¹⁸ スティムソン・センター上級研究員のグリエコ (Kelly Grieco) 氏は、ABC ニュースのインタビューに対して、「問題は、防衛側 (米国、イスラエル)」への発言。Patrick Reevell and Benjamin Siegel, “As war with Iran stretches on, some experts raise concerns over 'war of attrition' with missile stockpiles,” ABC News, March 5, 2026, <https://abcnews.com/Politics/war-iran-stretches-experts-raise-concerns-war-attrition/story?id=130719578>.

¹⁹ Diana Stancy, “Iran mission takes toll on US munition stockpile, lawmakers weigh supplemental defense funding,” *Breaking Defense*, March 3, 2026, <https://breakingdefense.com/2026/03/iran-mission-takes-toll-on-us-munition-stockpile-lawmakers-weigh-supplemental-defense-funding/>.

(1) 統合ターゲティングによる高密度打撃

第一に、多数目標に対する高密度打撃である。報道によれば、本作戦では約 48 時間の間に 1,250 以上の目標が攻撃されたとされる。この規模は、近年の地域紛争における航空作戦と比較しても際立っている。湾岸戦争やイラク戦争初期の航空作戦と単純に比較することには慎重であるべきだが、それでも今回の作戦におけるターゲティング密度が極めて高いことは否定できない。

重要なのは、単に多数の兵器を投射したという点ではない。多数の目標を短時間で処理するためには、目標の発見・識別、追跡、攻撃目標の決定、攻撃、戦果評価という一連の過程、すなわち F2T2EA (find-fix-track-target-engage-assess) に代表される、いわゆるキルチェーンと呼ばれるサイクルが、高いテンポで連続的に処理される必要がある²⁰。

米軍の統合ドクトリンである『JP3-60: ターゲティング』に示された統合ターゲティング・サイクル (Joint Targeting Cycle) に即して言えば、目標情報に基づく目的・効果・指針の設定 (Objectives, Effects, and Guidance)、攻撃目標の特定・分析 (Target Development)、兵器効果分析及び兵器・部隊の割り当て (Weaponing and Allocation)、航空任務命令 (Air Tasking Order, ATO) の作成・配布、作戦の実行、戦果評価という各段階が、統合された指揮統制の下で高速に回転していたことを意味する²¹。

したがって、本作戦の本質は単なる火力の誇示ではなく、多数目標を同時並行的に処理する高密度ターゲティング能力、すなわち高度に統合された作戦システムの成熟を示している点にある。この点で、本作戦は「多数目標攻撃」ではなく、統合ターゲティング・サイクルを極めて高い速度で回転させる能力、すなわち現代航空作戦におけるネットワーク化された打撃システム (networked strike system) の実態を示したものと理解できる。

このような高密度ターゲティングを可能にした背景には、ISR の優勢が存在する。多数の目標を短時間で処理するためには、目標情報の継続的な取得と更新が不可欠であり、衛星、無人機、電子情報、各種センサーによって構成される ISR ネットワークが戦場全体の状況認識 (situational awareness) を維持していなければならない。

さらに、このような情報優勢は、本稿冒頭で述べた戦場形成の過程とも密接に関係している。すなわち、サイバー、宇宙、電子戦などによって戦場環境を事前に整備し、相手の防空能力や指揮統制を攪乱したうえで、ISR によって得られた目標情報を基盤としてターゲティング・サイクルを高速に回転させることが可能となる。この意味で、本作戦は単なる航空打撃ではなく、戦場形成からターゲティング、打撃に至る統合作戦システムの成熟を示したものと理解できる。

²⁰ U.S. Joint Chiefs of Staff, *Joint Publication 3-60: Targeting*, U.S. Department of Defense, January 31, 2013, p. I-8, <https://archive.org/details/6379789-National-Security-Archive-Joint-Chiefs-of-Staff>.

²¹ *Ibid.*, p. C-3.

(2) 指導中枢を狙った打撃

第二に、政治・軍事の指導中枢を狙った打撃である。今回の作戦では、イランの政治・軍事指導部を狙った攻撃が実施されたと報じられている²²。これは、敵の指導中枢を直接攻撃することで、軍事能力だけでなく意思決定そのものに打撃を与えようとするものであり、斬首作戦（decapitation strike）的要素を含む作戦とみることができる。

もっとも、実際にどの程度まで指導部排除が作戦目的として明確に位置づけられていたのか、またその成果がどこまで確認できるのかについては、現時点ではなお慎重な検討が必要である。したがって、本稿では、指導部打撃の要素を含んだ作戦として理解するにとどめたい。

(3) 無人システムの統合

第三に、無人システムの作戦統合である。前節で述べたとおり、今回の作戦では無人機がISR、攻撃、被害評価など複数の役割を担ったとされる。無人システムは航空作戦において補助的な存在にとどまらず、ターゲティング・サイクルの一部として統合されつつあり、現代航空作戦のテンポと密度を支える重要な要素となっている。

また、イランのシャヘド型攻撃ドローンのような低空、低速で飛行する無人システムの普及は、防空側に高価な弾道ミサイル迎撃用防空ミサイルの使用を強いることで、サプライチェーンや備蓄体制の見直しを余儀なくされる可能性がある。長期持久的な消耗戦になり、相手国とどちらが先に折れるかという戦いになった時、無人システムは戦いの帰すうを決める存在になるかもしれない。

3 冷戦後の航空戦力運用思想

こうした特徴は、突如として出現したものではない。むしろそれは、冷戦後の航空戦力運用思想の発展の延長線上に位置づけることができる。

湾岸戦争では、米空軍大佐（当時）のワーデン（John Warden）による「ファイブ・リング・モデル」が、航空作戦の思想的基盤の一つとなった。このモデルでは国家を同心円構造として捉え、指導部や重要インフラなどの中心部を攻撃することで、戦争を短期終結に導くことが可能であるとされた²³。その発想の核心は、全ての兵力を破壊するのではなく、重要

²² Hugo Bachega, Ghoncheh Habibi, Robert Greenall, and Tom McArthur, "Iran's Supreme Leader killed in joint US-Israeli strikes, Trump says," *BBC News*, March 1, 2026, <https://www.bbc.com/news/articles/c70n9wlkx3lo>.

²³ 柳澤潤「航空作戦の概要について」『NIDS コメンタリー』第183号、2021年8月19日、2頁、<https://www.nids.mod.go.jp/publication/commentary/pdf/commentary183.pdf>；エリノア・スローン『現代の軍事戦略入門（増補新版）－陸海空からPKO、サイバー、核、宇宙まで－』奥山真司、平山茂敏訳、芙蓉書房、2019年、91-94頁。

な要素を選択的に攻撃することで戦争の帰すうを左右するという、戦争の効率化にあった。

その後、イラク戦争では「効果ベースの作戦 (Effects-Based Operations, EBO)」が提唱された。EBO は、敵の破壊それ自体ではなく、戦略的效果を生み出すことを目的とする航空作戦運用思想である²⁴。ここでは、どの目標を攻撃すれば望ましい効果が得られるかが重視され、前節の議論に通じるターゲティングの分析と武器割り当てが一層重要となった。

これらの思想は、結果として航空作戦のターゲティング構造を大きく変化させたのだと考えられる。すなわち、戦争の帰すうを左右する重要目標を選択的に攻撃するという発想は、実際の作戦運用においては、重要目標を構成する多数の要素を個別に攻撃するという形で具体化されるようになったのである。例えば、防空システム、通信ノード、レーダー、ミサイル発射機、指揮所といった構成要素は、それぞれが独立した攻撃目標として扱われる。これは、統合防空システム (Integrated Air Defense System, IADS) を構成要素単位で分解して無力化するという現代航空作戦の基本的発想とも対応している。この結果、航空作戦は少数の決定的目標を攻撃する作戦から、膨大な数の要素目標を処理する作戦へと変化したのだと考えられる。

さらに、ISR 能力の発展は、この傾向を一層強めた。衛星、無人機、電子情報、通信傍受などによって戦場の可視性が高まるにつれ、従来は把握されなかった多くの対象が攻撃可能な目標として認識されるようになった。言い換えれば、航空作戦は、少数の目標を選択的に破壊する作戦から、「戦場認識 (Battlespace Awareness)」が拡大した結果、膨大な数の目標を継続的に処理する作戦システムへと変化していったのである²⁵。

これらの思想と技術に共通する前提は、精密打撃と情報優勢によって戦争を効率化できるという考え方であった。すなわち、限られた打撃によって敵の戦略機能を麻痺させ、戦争をより短く、より軽くできると考えられていたのである²⁶。

しかし、その後の軍事技術の発展と作戦経験は、戦争の効率化がそのまま戦力の軽量化を意味しないことを示しつつある。その最も分かりやすい現れが、今回のイラン攻撃に見られた多数目標に対する高密度かつ継続的な打撃だと言えよう。

4 航空戦力運用の効率化の逆説

今回の作戦の重要性は、作戦規模そのものだけではなく、現代航空戦力運用の一つの逆説を示した点にある。すなわち、ISR 能力の向上によって攻撃可能な目標が増加し、それを処理するためにターゲティング・サイクルの回転速度と打撃密度が上昇する結果、弾薬・無人機・補給といった量的資源への依存が強まるという現象である。

本稿でいう「逆説」とは、戦争をより軽く、より効率的にするはずの精密化が、結果として新たな量的能力への依存を強めるという構造を指す。精密打撃能力の向上は、攻撃対象を

²⁴ スローン『現代の軍事戦略入門』273-279 頁。

²⁵ 同上、257 頁。

²⁶ 同上、273 頁。

むしろ拡大させた。従来は大規模施設が主な攻撃目標であったが、現在では移動式ミサイル発射機、レーダー、通信ノード、小規模施設など、多数の目標が攻撃対象となる。これは、精密化によって従来は攻撃対象として十分に扱えなかった要素までが、攻撃可能な目標として取り込まれるようになったことを意味する。

その結果、攻撃可能な目標の数は大きく増加する。精密打撃は戦争を軽量化するのではなく、攻撃対象の細分化によって戦闘密度を高めるのである。今回の 1,250 目標という数字は、この変化を象徴している。もっとも、このような高密度のターゲティングが常に航空作戦の一般的な形態であるとは限らない。今回の作戦には、陸上戦力を投入することなく、短期間でイランの軍事能力と指導部の意思を揺さぶることを狙った政治的意図が強く反映されていた可能性がある²⁷。その意味で、本作戦は現代航空作戦の一つの傾向を示すものであると同時に、特定の政治的・戦略的条件の下で実施された高密度打撃の事例として理解する必要がある。

さらに、このような作戦を実施するためには、インテリジェンス統合、目標優先順位決定、武器割り当て、同時攻撃能力など、極めて複雑な作戦システムが必要となる。すなわち、現代の航空作戦は、単に高性能な兵器を持てば成立するものではなく、情報と火力を高速度で結びつける巨大な作戦システムの上に成り立っている。

しかし、最終的に攻撃を実行するためには、弾薬、無人機、迎撃ミサイル、航空機運用、補給といった資源が大量に消費される。しかも、ここでいう量的能力とは、過去の総力戦における単純な兵力数ではない。精密弾薬、無人機、迎撃能力、補給・生産能力といった、現代戦に特有の持続的資源基盤を含む概念として理解すべきである。

つまり、精密化と効率化を追求した結果、逆説的に物量能力への依存が強まるのである。

この構造は、比喩的に言えば「速筋能力」と「遅筋能力」という観点から理解することもできる。「速筋能力」とは、瞬発的な能力であり、作戦テンポや精密打撃能力など、短時間で大きな効果を生み出す能力である。ISR ネットワーク、AI、精密兵器などはこの能力を強化する。一方、「遅筋能力」とは、持続的な能力であり、兵器生産、補給、継戦能力など、長期的に戦争を支える能力である。現代戦争では「速筋能力」が著しく強化されている。しかし、その結果として兵器の消費速度が増大し、「遅筋能力」の重要性が一層高まっている。つまり、戦争はより高速化しながら、同時により大きな工業力と補給能力を必要とするようになっていく。精密戦争は、物量戦争を過去のものにしたのではない。むしろ、新しい形の物量問題を現代戦争の中心に呼び戻しているのである。その意味で、今回のイラン攻撃は、このような精密化と量的依存の相互作用という現代航空作戦の構造的特徴を象徴的に示した事例と位置づけることができる。

²⁷ 実際、トランプ大統領は本作戦を「短期間の遠征」と表現し、地上部隊の投入については明言を避けている。「イラン作戦『短期の遠征』＝地上部隊派遣、明言避ける－米大統領」『時事通信ニュース』2026年3月8日、<https://sp.m.jiji.com/article/show/3728373>。

おわりに

今回のイラン攻撃は、前例のない規模の航空作戦であると同時に、現代航空戦力運用の逆説を示す事例である。

精密打撃、情報優勢、無人システムは航空作戦の効率化をもたらすと考えられてきた。しかし、それらの能力は攻撃対象の増大と戦闘密度の上昇をもたらし、結果として弾薬、作戦ロジスティクス、継戦能力といった量的能力の重要性を再び浮き彫りにしている。現代航空戦力は、瞬間的な打撃能力を大きく強化した一方で、それを支える持久能力への負担を拡大させている。この逆説は、今後の軍事戦略を考える上で重要な示唆を与えるものといえる。

この問題は、日本の防衛政策にとっても重要である。もちろん、一つの事例から一般化しすぎることは慎重であるべきである。中東における一つの作戦事例を、そのまま日本周辺の安全保障環境に単純転用することはできない。それでも、質的優位の追求が新たな量的要求を生み出すという構造は、日本にとっても無関係ではない。現代戦争では質的優位だけでは十分ではないこと、そして ISR 能力が向上するほど攻撃目標は増加し、作戦テンポが加速するほど兵器の消費も増えることは、より広い傾向として看過できない。

その結果、弾薬、ミサイル、無人機、補給、生産能力といった量的能力の重要性が高まる。今後の防衛力整備においては、質的優位を維持すると同時に、継戦能力や生産能力といった量的要素についても、従来以上に真剣に検討を進める必要があるだろう。精密化と情報優勢は戦争を軽量化するのではなく、むしろ攻撃可能な目標を増大させ、戦闘密度を高めることで、新しい形の物量問題を現代戦争の中心に呼び戻しているのである。

※本稿は、2026年3月8日時点で入手可能な公開情報に基づき作成している。

(戦略研究室 2等海佐 高橋 秀行 博士：安全保障学)

(本コラムに示された見解は、海上自衛隊幹部学校における研究の一環として発表する執筆者個人のものであり、防衛省、海上自衛隊の見解を表すものではありません。)